

車いすフェンシング・競技ボランティアガイドブック

一般社団法人 日本パラフェンシング協会



はじめに

この小冊子は競技ボランティアをご希望になる皆さんに、競技のことをよりご理解頂き、実際に試合会場や体験会の会場でボランティアの活動をして頂く際にご活用頂くために作成しました。皆さんが車いすフェンシング競技により親しんで頂き、私たちの仲間として一緒に活動して頂けることを願って止みません。なお車いすフェンシングという競技名称は2024年パリのパラリンピック大会以後に「パラフェンシング」と変更される予定です。

一般社団法人 日本パラフェンシング協会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル4階

基本知識

1. 障がい者の定義

心身の障害の発露により生活に制限を受ける者。(18歳未満を障がい児と呼ぶ)

2. ノーマライゼーション(Normalization)

障がい者施設の建設から始まる歴史の中で、障がい者を隔離、差別することが多く起こったことを反省し、健常者と同じ取り扱いをもって障がい者の尊厳を確保しようとする政策または運動。

3. バリアフリー(Barrier Free)

ノーマライゼーションの一環として障がい者が生きてゆく際の障害を取り除き、誰もが快適に暮らしてゆける環境を整備すること

4. パラリンピックの起源

1948年7月28日ロンドンオリンピック開会式当日にイギリスのストーク・マンデビル病院（Stoke Mandeville Hospital）で行われた競技大会だとされる。これは戦傷兵士のリハビリテーションとして「手術よりスポーツを」という理念で始められた。1960年ローマオリンピックの開会式に併せて同病院で行われた競技会が第1回のパラリンピックと呼ばれている。

車いすフェンシング競技の概略

車いすフェンシングは、「フレーム」と呼ばれる装置に車いすを固定し、競技者の腕の長さに応じて対戦者間の距離を調節して、上半身のみで競技を行います。

日本ではフレームのことをピストと呼ぶことが誤って定着しました。本来ピストと言うのは試合が設定された場所のことで、そこに敷かれるアルミニウム製の板のことをメタルピストと言います。その上に置かれるのがフレームです。車いすフェンシングで使われるメタルピストのサイズは長さ4M、幅1.5Mです（オリンピックフェンシングのメタルピストは長さが14M）。フレーム1個はパネル2枚、ディスタンスバー、ボックスレンチ、サイドストラップ、フロントストラップという各部品から成り立っていますが、フレームのパネルサイズは概ね1Mx1Mx10cm、重量はパネル1枚が30kg程度です。

フェンシングは中世の騎士たちによる実戦的な剣術から発祥していますが、19世紀には競技として欧州各地で競技として行われるようになりました。ルールを統一させるために1913年フランス・パリに国際フェンシング連盟（FIE）が設立され、近代フェンシングが始まりました。その由来からフェンシング用語はフランス語です。

オリンピックフェンシングも車いすフェンシングも個人戦では3種目の競技があります。使用する武器の名称、フルーレ（フォイル）、エペ、そしてサーブルが種目名になっています。

フルーレは突きだけが許され、有効面は頭部と四肢を除いた胴体の両面です。剣は軽量で突きの有効力は約500gです。有効面が広いので、試合運びが慎重になり、決着に時間がかかることもあります。

エペは同じく突きだけが許され、有効面は上半身です。剣は手を守るために大きな鍔を持っており、突きの有効力は約750gです。無効面である下半身には絶縁のスカートを着用して誤審を防ぎます。

サーブルは突きだけでなく斬ることもできます。有効面は腰より上の上半身全てです。

フルーレとサーブルでは攻撃権があります。攻撃権とは先に攻撃したほうが優先権を持つ、ということです。攻撃した相手の剣を払う（パレードと言います）によって攻撃権は防御側に移ります。相打ちの場合、どちらに攻撃権があったかはレフェリーの判定に拠りますが、判定がつかない場合は無効となります。エペには攻撃権がなく、従って同時に突きが決まった場合は双方にポイント有効となります。

個人戦と団体戦が行われますが、個人戦のプール戦（予選）では3分間（実働）5トゥッシュ（突き）先取で勝負が決まります。エリミナシオン・ディレクト（トーナメント、通常ベスト16以降）及び決勝戦は3分間1セットとして3セットが行われ、15点（突きが1回決まると1点）先取方式で行われます。

団体戦はフルーレかエペ1種目で行われるのが普通です。1チーム4人（一人は補欠）で戦われ、1試合は3分間（実働）5トゥッシュ（突き）先取で勝負が決まります。45トゥッシュを合計で先取したチームが、勝ちになります。

パラリンピックで採用されている競技には「クラス分け」という制度があります。障がいには様々な自由度の制約があるため、選手ができるだけ同じ条件と環境でプレーできるようにすることが目的です。車いすフェンシングにはカテゴリーが三つありますが、このうちパラリンピックなどの公式大会では二つが採用されます。『カテゴリーA』はいわゆる座位が取れる選手が該当します。腹筋を使って上半身を支えることができるのが条件です。『カテゴリーB』は座位が取れない選手、つまり腹筋が使えないか腹筋そのものの機能が失われた選手が該当します。上肢に障がいがある選手もこのカテゴリーに属します。もう一つ『カテゴリーC』がありますが、これは主として頸椎損傷などのために上下肢に重度の障がいを負った選手が該当します。このカテゴリーはパラリンピックでは採用されておりません。

クラス分けは専門資格を持ったクラシファイヤーと言う人が複数で担当し、選手の身体的な制約を定められた医学的な手順によって測定したり、動かしたりしてどのカテゴリーでプレーするのが適切かを判断します。

車いすフェンシングは1960年の第一回ローマパラリンピックからの正式競技種目で、ヨーロッパで特に盛んな障がい者スポーツの一つです。ユニフォーム、マスク、などの用具や剣はオリンピックフェンシングと同じものを使いますし、ルールも用語もほぼ同じですが、固定した車いすの上で戦うという独特の仕組みに起因するルールがいくつか存在します（競技者間の距離計測、車いすの座席マットの高さ規制など）。

以前は傷害を負った軍人が活躍する場面が多く、フランス、イタリア、ドイツなどの伝統国に加え、東ヨーロッパ諸国や中近東の国々にも有力選手がいましたが、力を入れる国が増えてきて、有力選手が更に分散する傾向にあります。IWAS

(International Wheelchair and Amputee Sports Federation 国際車いす・切断障がい者スポーツ連盟：<http://iwasf.com/iwasf/>) には現在57か国が加盟していますが、最近では中国、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ハンガリー、ポーランド、イタリア、

ブラジル、フランスなどが大きな国際大会で良い成績を残しています。近年中国の躍進は著しく、リオ、東京とパラリンピックでの大量メダル獲得など、アジアでは敵なしの状態ですが、これは国を挙げての支援策が奏功しているものと見られます。

日本の車いすフェンシングの歴史

日本で開催された1964年の東京パラリンピックに日本の車いすフェンシング選手が出場した記録はありますが、その後国内での競技者は存在しませんでした。1994年、京都市障害者スポーツセンターでスタートしたグループをもととして、1998年に日本車いすフェンシング協会が京都に設立されました。

国内での競技人口は約20名と少ないため、国内の選手権大会が多く開催できていません。選手達はヨーロッパ各国を中心に開催されている世界選手権やワールドカップ、アジアパラ（旧称フェスピック）などへの海外遠征で腕を磨いています。

2000年シドニー、2004年アテネ、2008年北京の各パラリンピックに代表選手を送り出したのち、しばらく活動が休眠状態でしたが、2015年、TOKYO 2020を目指して新たにNPO法人日本車いすフェンシング協会が新たに設立され、再スタートを切りました。京都の常設練習場を主な拠点として活動していましたが、2019年に東京都北区に新しい選手の強化拠点（NTC）が整備され、選手の強化活動は東京に移りました。これを反映して東京2020パラリンピック終了後、一般社団法人日本パラフェンシング協会が東京都に立ち上げられ、体制を一新しています。

代表選手の強化とは別に東京北区赤羽体育館では毎週金曜日に、江戸川区では学校の体育館を借りて第一、第三土曜日に練習会を行っています。また広島や北海道に同好会があり、活動をしています。

IWASは競技普及のために、ワールドカップ大会や国際競技大会を様々なカテゴリーで数多く、世界各地で開催しています。最高位にあるのはパラリンピック、次が世界選手権、その後は大陸別選手権、ワールドカップ、国内選手権となります。また年齢別に分かれた大会も多く、U-23、U-17の大会は特に欧州で多く活発に開かれています。ワールドカップは1年に5回開催されています。初めは選手たちの負担を考慮して、空港に近いホテルでの開催が主体でしたが、近年はパラリンピックの開催都市で急速にパラスポーツ設備が整ってきたことを受けて、開催地が固定化される傾向にあります。常連になっているのはピサ（イタリア）、ワルシャワ（ポーランド）、エゲル（ハンガリー）などですが、新しく招致する国もあります。2019年の世界選手権は清州（韓国）で行われ、また2022年5月のワールドカップはタイのチョンブリで開催されました。2018年12月に京都にて日本で初めてとなるワールドカップ大会が27か国、178名の選手の参加で行われ、成功裡に終了しました。日本の櫻井杏理選手が女子フルーレ個人カテゴリーB（座位が取れない障がいのクラス）で銅メダルを獲得しました。2022年5月タイのチョンブリで行われたワールドカップでは藤田道宜選手が男子フルーレ、エペ個人カテゴリーCの両方で金メダルを獲得しました。同大会では櫻井選手も女子エペカテゴリーBで3位となりました。

車いすフェンシング競技のルール

種目	得点	使用する剣
フル ーレ	<ul style="list-style-type: none"> ・メタルジャケットを着用した胴体（胸、腹、背中）への「突き」 ・500gの力で突いた場合剣先のバネが反応してポイントとなる ・攻撃をしかけた選手が「攻撃権」を得る 	重さ：500g以下 全長：110 cm以下 ガードから剣先まで： 90 cm以下 ガードの直径：12 cm以下
エペ	<ul style="list-style-type: none"> ・上半身全ての有効面（腕、マスクを含む）への「突き」 ・メタルのスカートを着用する下半身は無効面となる ・750gの力で突いた場合剣先のバネが反応してポイントとなる ・「攻撃権」はなく、同時ポイントも生じる 	重さ：770g以下 全長：110 cm以下 ガードから剣先まで： 90 cm以下 ガードの直径：13.5 cm以下
サー ブル	<ul style="list-style-type: none"> ・上半身への「突き」と「斬る」 ・剣先のセンサーでランプが点灯 ・攻撃をしかけた選手が「攻撃権」を得る 	重さ：500g以下 全長：105 cm以下 ガードから剣先まで： 88 cm以下 ガードの直径：縦 15 cm、横 14 cm以下 ガードの深さ：15 cm以下

得点：

個人戦：上記3種目ともに、予選のプール戦は3分間（実働）5タッチ（突き）とします。エリミナシオン・ディレクト（トーナメント、通常ベスト16以降）及び決勝戦は3分間（実働）ごとに1分間の休憩を与える3セット制で15タッチとします。全ての試合において、タイムアップ時に同点である場合、優先権を決定する

ための抽選の後、1分間の延長戦を行います。延長戦で先に有効な突きを入れ勝者が決定した場合のスコアは、5本勝負の場合V-4、15本勝負の場合V-14となります。

団体戦：4人の登録が認められ、そのうち3人の選手の出場が可能です。両チーム3名が総当たりで対戦し、1試合は3分間（実働）5トゥッシュ（突き）先取で勝負が決まります。45トゥッシュを合計で先取したチームが、勝ちになります。

ボランティアの役割について

1. 競技ボランティア

車いすフェンシング競技における競技ボランティアの役割

車いすフェンシングは競技ボランティアの助けがなければ成り立たない競技であることが大きな特徴です。競技者によってはピストの上に置かれたフレームに車いすで上がる際に押し上げて貰うことが必要な人もいますので、介助をすることから始まり、一連の作業は介助に終わる、と理解してください。また一連の作業を如何に円滑に、かつ早く行えるかによって競技時間が大幅に短縮され、大会成功の大きなカギになります。

以下に競技ボランティアの主要業務であるフレームへの固定作業について説明します。時間の制約、器具取り扱いに慣れが必要なこと、選手と至近距離にあること、観衆の視線を感じるなどプレッシャーも大きいし、体力を要する仕事ですが、海外の強豪選手たちと触れ合い、間近で文字通り真剣勝負の迫力を体験できる醍醐味は忘れられないものになるでしょう。

なおオリンピック、パラリンピックでは試合を行うために定められた区域をFOP (Field Of Play)と呼びます。フェンシング競技ではFOPは各ピストがそれに該当します。ピストにはメタルピストと呼ばれるアルミの板を敷きます。車いすフェンシング競技では、更にメタルピストの上に鉄製のベースを持つフレームを置いてそこに車いすを固定します。

- ① まず入場する選手の介助（エスコート）が必要です。車いすに乗った選手のサポートと競技用車いすそのものの移動があります。
- ② 選手間の距離決定（写真は京都ワールドカップ）

ピストに上った選手の車いすをフレームに仮固定します。これは車いすの車輪をフレームに付属している金属製のサポートに掛けて固定する作業です。フレームのメーカーによってサポートの形状が異なり、固定方法も違いますので事前に学習が必要です。そしてこれが終わると審判が二人の選手の距離を計測して決定します。（写真）



一人の選手が剣を持った腕の肘を上方直角に保ち、相手の選手を持った剣の切っ先が丁度そこに触れる距離が適正とされます。交互にそれを繰り返して、審判が最終決定をします。（エペは直角に曲げた肘の内側、フルーレは外側で合わせます）

③ 選手の位置固定

距離が決まるとボランティアがフレームのパネルとパネルとの間にあるセントラルバーの長さを調節して審判の決めた距離に合わせ、フレームの両パネルの位置を固定します。セントラルバーの種類はメーカーによって異なり、調節方法が違うので事前の学習が必要です。

④ 車いすをフレームに固定

最後に選手の乗った車いすをフレームにストラップと呼ばれるバンドと金具で固定します。ストラップを車いすのフレームに巻き付ける際、選手から注文が付くことがあります。言葉が分からなくても選手の指先による指示に従えばいいので、言葉が通じないことを心配する必要はありません。選手たちは国際大会経験が豊富で言葉が通じないことには慣れています。ストラップをフレームに巻きつけてうまく通したら、金具に付いているレバーをカチャカチャと上下に動かしてストラップを締めて固定します。これで試合開始を待ちますが、メタルピストの外に出て、観客の邪魔にならないようにしゃがんで下さい。尚痙性と呼ばれる症状が出る選手が稀にいます。痙性を発症すると足が本人の意思と全く別に動き、時折前方にける動作をすることがあります。従ってストラップ固定作業をする際は選手の前方に屈まずに、斜め前方から作業することが安全です。

フレームの組立て方と固定の仕方は下記ビデオを参照してください：

[Wheelchair Fencing Frame |Pallagi 2015| - Bing video](#)

[\(115\) 牛込ビデオ - YouTube](#)

Pallagi社はハンガリーのメーカーですが、東京2020パラリンピックの車いすフェンシング競技で国際入札の結果選定されました。同社のフレームは全部で40セット納入されましたが、今後国内の競技普及に活用されていく計画です。

⑤ 試合中に様々な理由で車いすをフレームに固定し直す必要があることがあります。落ち着いて同じ作業をして下さい。理由は次のような事象によります：

- ・右利きの選手と右利きの選手が対戦した後に左利きの選手が登場した場合、一度ディスタンスバーを外して片方のパネルを90度回転してからディスタンスバーを再度入れてフレームを組み直し、3~4人でフレーム全体を持ち上げて改めてセットします。（最近イタリアのメーカーにより、この作業が不要になったフレームも登場しています）
- ・選手の激しい動きのためにフレームが破損し、それを交換する場合
- ・選手の用具が壊れたり外れたりして交換の必要がある場合
- ・選手が負傷し、車いすから降りて応急処置を受けた後に競技再開する場合

⑥ 試合終了とともに直ぐにストラップを外し、選手が速やかに退場できるようにします。ストラップを締めつけ固定していた金具は、レバーの把手部分を掴んで上方に強く真っ直ぐに引き上げるとストラップが緩んで外れるようになっています。選手の車いすを押して退場が円滑に出来るようにサポートしたほうがいい場合があります。

⑦ その他の競技ボランティアの役割

- ・フレーム破損・交換の場合に壊れたフレームの搬出や新しいフレームの搬入作業
- ・選手に対する介助（外れたワイヤの取り付けや用具交換の手伝いなど・通常はチームのコーチが行うが単独で参加する選手も時々いる）

2. 武器検査

いかなる大会においても、選手が使用する用具や剣、競技用車いすなどの検査は重要な実施項目です。通常、武器検査は大会開始2日前に参加全選手に対して実施されます。これは選手が競技で使用したいとする武器と車いすの全数検査です。

大きな大会では必須項目となりますので、参考までに概観しておきます。

武器検査の受付、特に受付での選手・武器の登録作業、実際の検査作業と払い出し時の確認やシール貼りなどの作業を、フェンシング経験のある、または武器・車いすなどに関する研修を受けたボランティアの皆さんにお願いすることがあります。

車いすフェンシングではオリンピックフェンシングと同様に、3種目夫々に使用される剣が異なりますが、それぞれに破損や欠陥がないかを目視で検査するほか、ゲージボックスと呼ばれる特殊な検査機を用いて、剣のサイズ、寸法、たわみなどを検査します。

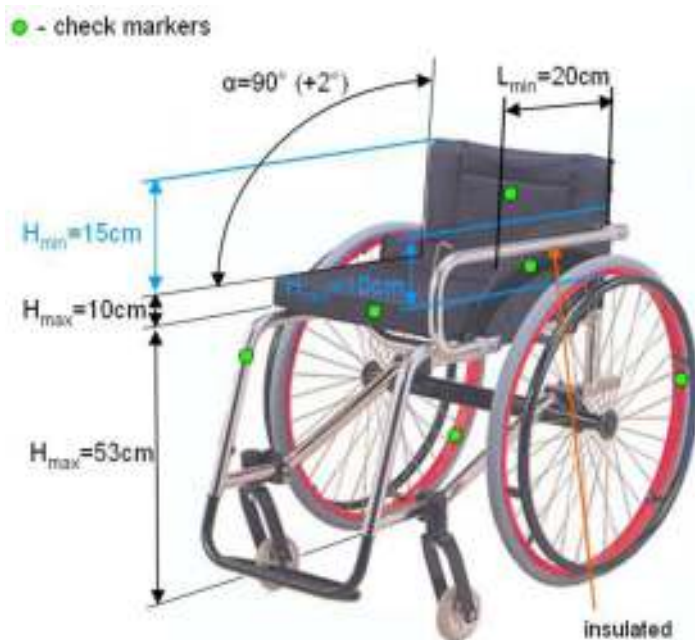
マスク、ジャケットはオリンピックフェンシングと同様ですが、エペでは下半身に着用するスカートなど、車いすフェンシング特有の用具もあります。これらは基本的にFIE（国際フェンシング協会）の規定に合っているかどうかを検査します（具体的にはFIEのステッカー、シール、スタンプなどの有無を目視で検査します）。

また電気判定に使用されるワイヤ類がいくつもありますが、これらは抵抗器を用いて通電時の抵抗値を確かめます。

マスクについては固定されるべき部品がしっかり固定されているかどうかなどを目視で確認します。またメッシュの部分についてはテスターと呼ばれる器具を用いて隙間が広がっていて剣が貫通する恐れがないかどうか、チェックします。

いずれも合格すればスタンプを押すか、シールを貼ります。

また車いすもクッションの高さなど6か所を治具でチェックして合格したものにはシールを貼ります。



Fencing wheelchair for right-handed fencers

In Blue: Measurements taken with fencer seated on cushion

ボランティア諸注意

1. 服装について

下半身については自由ですが、金属の武器などが身近にある環境なので、負傷を避けるため、肌を露出する短パンは不可です。靴については動きやすい運動靴やスニーカーを着用してください。ハイヒール、サンダルなどは不可です。

2. 更衣ロッカーについて

更衣ロッカーは会場によって有無が分かります。事前に開催者に確認して下さい。貴重品は各自ポーチバッグなどによって管理してください。盗難などについて主催者側は責任を負いません。

3. 食事について

主催者に用意があるかないかを事前に必ず確認してください。

4. 交通費の支給について

主催者に事前に確認して下さい。

5. けがや事故について

主催者側はボランティアの皆さんのけがや事故について基本的に責任を持ちません。参加する前に体調管理を心がけ、万全の体調で参加してください。またコロナ感染防止対策については事前のPCR検査や抗原検査、体調管理記録の提出などが求められることが多いので、主催者によく確認し、その指示に従って下さい。

以上